「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」第１回総合会議
於：札幌学院大学
2003 年 11 月 15・16 日

４．生産・流通研究

銭貨分析から探る流通
―遼から元を中心に―

三宅　俊彦（國學院大學オープンカレッジ）

１．はじめに

銭貨は、中国においては流通の基本であり、特に宋代では銅の方孔円銭が基準通貨として流通していた。これは、同時期に興亡した、北方の王朝である遼・金においても、同様である。また元では、南宋を滅ぼして東アジア一帯を支配下におさめた後、基準通貨は紙幣と銀に替わるが、少額貨幣としてなおも銅銭が流通していた。

ここでは、銭貨の分析を通して、この時期の東北アジアの流通探ってみたい。対象とする王朝は、遼・金・元である。これらの王朝の領域から出土する銭貨は、土城の調査によって収集されたり、墓に副葬されたものが出土したりして、報告される事例は非常に多い。それら出土銭の中でも、ここでは特に窖蔵銭（こうぞうせん）を中心に分析する。

窖蔵銭は、中国で使用される用語であり、土中に人為的に埋められた銭貨を意味する。日本で言うところの「備蓄銭」や「埋納銭」に相当する。これを翻訳する場合、「備蓄」や「埋納」という、遺物の「性格」が付与された用語では、適当ではない。何故なら、「窖蔵」という語は、性格を意味しないからである。適当な訳語がないため、ここではとりあえず、中国語のまま「窖蔵銭」と表記する。

窖蔵銭の多くは、「戦乱を契機として、緊急避難的に土中に埋められたもの」であると、筆者は考えている[1)]。そのため、これら窖蔵銭は、多くの場合流通していたその場所から、あまり遠くないところに埋められたと考えられる。その分布を観察することにより、銭貨流通の行われていた地域を導き出すことができるであろう。また、緊急避難的に埋めたものであるため、銭貨を選択して埋める時間的余裕は、ほとんどなかったと思われる。そのため、埋められている銭貨の種類や数量を観察することにより、当時の流通貨幣の状況を把握できると考える。

窖蔵銭の分析によって得られる、銭貨流通の行われた地域および、流通した銭貨の種類と数量を把握することは、東北アジア地域で発見される銭貨を位置づける上で重要である。これらは、大量の銭貨がまとまって出土するため、当時の銭貨流通の状況が具体的に把握でき、その他の遺跡から出土した少量の銭貨を分析・比較するための、基礎的な資料となるからである。本論では、試みのひとつとして、モンゴル国におけるモンゴル帝国期から元代にかけての、都市遺跡から出土する銭貨について、窖蔵銭との比較検討を行いたい。

２．窖蔵銭の分布

まず、各王朝で発見されている、窖蔵銭の状況について、分布を中心に概観する。

（１）遼

遼の窖蔵銭は13例ある（図１）。吉林省、遼寧省、内蒙古、河北省に分布しており、遼の版図の中でも南部に集中している。これは、契丹族の本拠地および宋と接する地域であり、貨幣経済

が盛んに行われた地域と、ほぼ重なると考えられる。発見された窖蔵銭の銭貨は、少ないもので９kgほど、多いもので800kg近くである。

これらの窖蔵銭は、みな偶然に発見されたものであり、遺跡や遺構の詳細は不明なものが多い。しかし、いくつかの事例は、その性格が推測可能である。たとえば、三道営子では、遼代の遺物が広範囲に見られる遺跡から、木箱に詰められた20万枚あまり（約776kg）の銭貨が発見されている。この遺跡は、饒州城に比定されている土城址から、北に20kmほどの地点にあるため、饒州付近に駐屯した軍の遺跡と推測されており、この窖蔵銭も軍庫あるいは国庫のたぐいではないか、と考えられている[2)]。

また、遼・上京でも６万枚あまり（約 280kg）の銭貨が土坑から発見されている[3)]。これは、その性格は不明であるが、府庫などの可能性もあろう。

（２）金

金の窖蔵銭は97例あり、華北から東北地区にかけて広い範囲に分布している（図２）。これは金の版図の南部に相当する。金においては、中原から東北地区にかけて、貨幣経済が非常に発達していた様子が窺える。特に北宋の版図を領有した華北においては、北宋の貨幣経済もまた引き継いだと言えよう。発見された窖蔵銭の銭貨は、少ないもので百数十枚、多いもので1.5tあまりである。

発見された窖蔵銭の性格は、ほとんどが不明であるが、いくつかはその性格が推測されている。たとえば、磨盤山から出土した、壺に入れられた123枚の銭貨は、農耕具や武器と共に埋められていた。周囲から磚や焼け土などが出土しており、金代の遺跡であったと考えられている。報告者は、この銭貨と農耕具・武器などが、一組になって出土している状況から、金代の壮年者皆兵制度である「猛安謀克」と関係を指摘している[4)]。

また、王砦村では磚で蓋をされた土坑から 1.5t の銭貨が出土しているが、その量を考えると、あるいは軍庫や府庫の可能性もあろう[5)]。

（３）元

元代の窖蔵銭は９例見られる（図３）。これはモンゴル帝国期を含むもので、吉林省の城鎮公社から出土した、嘉熙通寶（1237年初鋳）を最新銭とする窖蔵は、金滅亡後すぐのものである[6)]。その他は14世紀の元代のものである。事例が少ないため、分布の状況は把握しにくいが、華北、華南ともに発見されており、ほぼ中国全土に散在している。これは、貨幣流通が行われていた中国の領域に重なっており、本拠地であるモンゴルには窖蔵銭の事例は見られない。発見された窖蔵銭の銭貨は、少ないもので数十枚、多いもので約1.5tである。

性格の推測できる事例は多くない。河北省遵化県では、貿易センターの工事中に多数の陶磁器類と一緒に、貯金箱（撲満）に入れられた48枚の銭貨が出土した。これなどは、貯金箱に入れられていたのであるから、子供の貯金であったろう[7)]。陶磁器類と共に出土しているところを見ると、緊急避難的に埋めたものではないかと思われる。

また、桃花灘で発見された銭貨は1.5tあまりであり、大量であることから軍庫や府庫の可能性もあろう[8)]。

３．窖蔵銭の銭種組成

次に、窖蔵銭の銭種組成を見てみたい。大量に発見される窖蔵銭は、当時の銭貨流通の様相を反映していると考えられる。そのため、銭種を分析することで、どこで鋳造された銭貨が、どの様な割合で使用されていたかを知ることができる。

（1）遼

遼代の窖蔵銭で、各種銭貨の数量が報告されているものは、雲霧山村[9)]、赤峰市[10)]、土木富州[11)]の３事例である（表１）。

これによれば、銭貨の種類は非常に多く、古くは戦国時代・燕国の一化（刀）や漢代の五銖銭なども使用されていたことが分かる。また、唐の開元通寶も非常に多く見受けられることも、注目に値する。その一方で、遼で鋳造された銭貨はほとんど見られないことも、重要であろう。

これらの銭貨を数量の割合で見ると、唐以前が 0.22%、唐から五代十国が 30.77%、北宋が 68.94%、遼が 0.07%となっている。唐から五代十国にかけての銭貨の内、そのほとんどは開元通寶である。また、北宋の銭貨が約７割を占めている。総じて、遼代の銭貨流通の状況は、開元通寶と北宋銭がその大部分を占めており、遼で鋳造された銭貨は、ほとんど流通していなかったことが分かる。

（2）金

金代の窖蔵銭で、各種銭貨の数量が報告されているものは、14 事例ある（表２）。これらを見ると遼の状況と同様、古くは秦・半両などの銭貨が使用されている。また、開元通寶の数量も多い。

時期ごとの銭貨量の割合を見ると、唐以前が 1.66%、唐から五代十国が 8.00%、北宋が 90.36%、南宋が 0.70%、金が 0.77%などとなっている。唐から五代十国にかけての銭貨では、開元通寶がその多くを占める。また、北宋銭の割合が高く、全体の９割以上を占めている。その一方、金で鋳造された銭貨は 0.77%で、全体の１%にも満たない。金の銭貨流通は、総じて開元通寶と北宋銭がその大部分を占めると言えよう。

（3）元

元代の窖蔵銭で、各種銭貨の数量が報告されているものは、李家湾[12)]、烏黽墩[13)]、夏禹村[14)]の３事例である（表３）。これらを見ると、依然として漢・五銖などが使用されていたことが分かる。また、唐から五代十国にかけての銭貨では、やはり開元通寶が多くを占める。

各時期の銭貨の割合を見ると、唐以前が 0.16%、唐から五代十国が 5.92%、北宋が 73.54%、南宋が 20.01%、金が 0.15%、元が 0.21%となっている。北宋銭がもっとも多く、全体の７割以上を占め、次いで南宋が２割を占める。しかし、元で鋳造された銭貨は、0.21%しかなく、非常に低い割合に止まる。総じて、開元通寶と北宋・南宋銭が、その大部分を占めると言えよう。

（4）銭種組成の比較

ここまで見てきた遼、金、元の各時期の銭貨流通の状況を、各種銭貨の数量の割合によって比較したものが、図４である。

これを見ると、唐から五代十国にかけての銭貨（そのほとんどは開元通寶である）が遼では３

割を占めるが、金や元では徐々にその割合を減らし、金から元にかけて南宋の銭貨の割合が増えることが看取される。また、北宋銭はすべての王朝においてもっとも多く、金では９割以上、遼と元でも７割前後を占めることが分かる。

その一方で、各王朝で鋳造された銭貨は、自国内にもかかわらず、ほとんど流通していなかったことが見て取れる。これは、北方に興った王朝では銭貨を鋳造するものの、名目的な意味づけしか持たず、実際の銭貨流通は、圧倒的に鋳造量の多い中国の銭貨、特に北宋銭に依拠していた実態を示している。

参考までに、南宋の各種銭貨の数量を示しておこう（表４）。唐以前が 0.15%、唐から五代十国が 6.50%、北宋が 91.95%、南宋が 1.39%、金が 0.02%である。この様な比率は、金の状況に酷似している。このことからも、遼、金、元の銭貨流通は、中国で鋳造された銭貨に深く依存していたことが明らかであろう。

以上の分析により、遼、金、元の銭貨流通の実態は、ほぼ明らかになったと考える。では、東北アジアにおいて、実際に遺跡から出土する銭貨を分析する際、この様な銭貨流通の状況に照らして、いかなる比較検討が可能なのであろうか。ひとつの試みとして、モンゴル国の都市遺跡から出土する銭貨を例に取り、分析を試みたい。

４．東北アジアの出土銭―モンゴルの事例―

（１）モンゴルの出土銭

ここでは、モンゴル国における、モンゴル帝国期から元代にかけての、都市遺跡から出土する銭貨の様相を見ていきたい。そして、それらの事例からどの様な事柄が読み取れるのか、窖蔵銭との比較から検討する。

まず、銭貨の出土する遺跡の概要を見ておきたい。これまで銭貨の出土が報告されている都市遺跡は、３遺跡である。

①カラコルム（Kharakhorum）

カラコルム遺跡は、モンゴル帝国の第２代皇帝ウゲデイが、1235 年から建設を始めた都市遺跡であり、1267 年に第５代クビライによって大都が建設され、遷都が行われるまでモンゴル帝国の首都であった。大都への遷都後も、カラコルムはモンゴル高原の拠点として、元代を通じて重要な役割を担っていた。

カラコルム遺跡では、これまで幾度か発掘調査が行われているが、中でも 1948～49 年にキセリョフが行ったものが大規模である。彼は城内中央に位置する建物跡（十字路の家）、東門、ウゲデイの宮殿（万安宮）の発掘を行い、それぞれの地点から銭貨を発見している。その内訳は、十字路の家で 129 枚、東門で 57 枚、宮殿で 10 枚であった[15)]。

それぞれの地点で出土した、銭貨の内訳を見ると（表５）、十字路の家と東門では、北宋銭を中心としていたことが分かる。その一方、宮殿では 10 枚中６枚が、金で鋳造された大定通寶であった。十字路の家や東門と、宮殿では、銭貨の種類が異なることが看取される。

②アウラガ（Avraga）

アウラガ遺跡は、チンギス・カンが本拠地である、大オルドを設営した遺跡であると考えられている。また、第２代ウゲデイも、1235 年にカラコルムを建設するまで、この地に大オルドを置いていた。そして、カラコルム遷都後には、チンギスの大オルド跡として神聖視され、霊廟が設けられて聖地としての役割を果たした。

アウラガ遺跡では 1992 年以降、数度にわたり加藤晋平・白石典之による調査が行われており、その調査は現在も継続中である。これらの調査の中で、発見された銭貨は 15 枚である[16]。遺構に伴うものはなく、すべて表面採集であり、内訳は金の大定通寶 13 枚、北宋の咸平通寶１枚、皇宋通寶１枚であった（表５）。金で鋳造された大定通寶が、15 枚中 13 枚と非常に多いことが特徴である。

③シャーザン・ホト（Shaazan-Khot）

シャーザン・ホト遺跡は、白石典之による調査により、第２代ウゲデイの冬の宮殿である、「オンギのオルド」と推定されている。宮殿と考えられる建物を含む、多くの建物跡と陶磁器類が散乱する、都市遺跡である。

このシャーザン・ホト遺跡では、白石典之が踏査時に表面採集した、９枚の銭貨が報告されている[17]。白石によれば、これらはみな宮殿以外の建物や、建物群跡の中から発見されたものであるという。内訳は、開元通寶１枚を除き、他はみな北宋銭であった（表５）。

（２）貨幣流通と銭貨の選択

次に、これら３遺跡から発見された銭貨から、どの様なことが導き出されるか、検討してみたい。まず気づくのは、北宋銭を中心とした遺跡・地点と、金の大定通寶を中心とした遺跡・地点があることであろう。まとめると、次のようになる。

北宋銭が中心：カラコルム十字路の家、カラコルム東門、シャーザン・ホト
大定通寶が中心：カラコルム宮殿、アウラガ

①貨幣流通

これらを、窖蔵銭から導き出された、銭貨流通の状況と比較してみた場合、北宋銭を中心とする遺跡・地点の方が、より銭貨流通の実態に近いことは明らかであろう。

カラコルム遺跡の十字路の家と東門は、それぞれ都市の中心部と中国からの物資が運び込まれた城門である。これらから出土する銭貨は、モンゴル帝国における銭貨流通の様相を反映していると考えられる。これらの地点の銭貨が、北宋銭を主体としていることは、金や南宋といった、同時期の中国の王朝と似通った状況であったことを示している。カラコルム内には、多くの漢人が居住し、都市生活を営んでいた。また、中国から大量の物資も搬入されていた。この様な状況の中で、銭貨流通も中国本土と類似した状況を呈することとなったと考えられる。

シャーザン・ホト遺跡も、同様の状況が想定できる。北宋銭主体の銭貨が採集された建物群は、この遺跡の都市生活者の残した遺構であると考えられる。ここもまた、カラコルムの十字路の家や東門と同様、中国本土の銭貨流通の影響を受けていたと言えよう。

②銭貨の選択

一方、カラコルム遺跡の宮殿と、アウラガ遺跡では、金の大定通寶が多く見られた。カラコルム遺跡の宮殿では 60%、アウラガ遺跡では 86.67%が大定通寶である。これは、窖蔵銭による銭貨流通の実態とは、大きく異なる。大定通寶の窖蔵銭に占める割合は、金本国でも 0.03%であり、非常に少ない（表２）。この様な大定通寶の比率は、カラコルムの宮殿とアウラガ遺跡が、銭貨流通の影響下になかったことを示しており、同時に大定通寶を意識的に選択していたことを窺わせる。

カラコルム遺跡の宮殿は、ウゲデイの建てた万安宮であると考えられており、皇帝の住む場所として、神聖視されたであろう。当然、一般の銭貨流通の行われた市場からは、隔絶した存在であった。

アウラガ遺跡も、チンギス・カンの大オルドとして機能し、カラコルムへの遷都後は聖地として厳重に守られ、祖先を祀る霊廟が設置されて、常に祭祀官が配されている。このことからも、アウラガ遺跡がモンゴル帝国にとって、非常に重要な場所であったことが分かる。出土した銭貨が、銭貨流通の実態と異なるのも、それを傍証するものと言えよう。

ではなぜ、この様な神聖視された場所で、大定通寶が多く発見されるのであろうか。これらの大定通寶が、金を攻撃した際の戦利品でないことは、金の窖蔵銭が北宋銭主体であったことから明らかである。つまり、カラコルムの宮殿やアウラガ遺跡から出土する大定通寶は、何らかの理由により選び出されていたと考えられるのである。

筆者はその理由を、チンギス・カンの大オルドやカラコルムの宮殿という、神聖な場所に持ち込まれる銭貨として、皇帝や王族に好まれ、選択されたのではないかと推測している[18)]。

大定通寶は、「瘦金体」と呼ばれる精美な書体で銘文が書かれ、銭貨自体の作りも宋銭に比べ大きく立派である。また、「大定」を「大いに定まる」と読めば、モンゴル帝国を拡大して版図を広げ、世界を平定しようと志す皇帝や王族たちに、喜ばれる字義であろう。

大定通寶を選択的に用いる例は、他にも存在する。第５大クビライの築いた上都の近くに所在する、元代の墓地である臥牛石墓地の３号墓では、大定通寶ばかり 51 枚が副葬されていた[19)]。墓の主人がどの様な人物であるかは不明だが、モンゴル帝国において大定通寶が好まれたことを示す一例である。

また、中国本土の銭貨流通の影響下にあった、カラコルムの十字路の家でも、大定通寶の割合は 6.20％である。金の 0.03％と比べるとかなり高い割合をしめす。これも、モンゴル帝国において、大定通寶が好まれたことを示唆していると言えるかも知れない。

５．まとめと課題

本論では、遼から元の時期を中心に、銭貨の分析からその流通の状況を探った。

まず、出土銭貨の状況を明らかにするため、窖蔵銭から遼、金、元それぞれの王朝の分布と銭種組成を分析した。分布では、遼と金は中国本土に近い地域や、支配下に入れた華北地域で多く発見されており、北方地域にはあまり見られない状況が明らかとなった。また、元では支配下に入れた中国本土では、全国的に見られるが、本拠地のモンゴル高原では見られなかった。これは、銭貨流通の範囲に粗密があり、銭貨流通経済の中心地である中国と、その周辺で盛行していたことを示している。

次に、窖蔵銭の銭種組成についての分析を行った。その結果、遼、金、元とも、自国で鋳造した銭貨はきわめて少量しか流通しておらず、銭貨流通の主体は唐の開元通寶と、北宋銭に依存していたことが示された。

この様な銭貨流通の実態をふまえ、東北アジアで出土する銭貨を、窖蔵銭と比較することによって、どの様なことが明らかにされるのか、検討した。ここでは、試みにモンゴル国の都市遺跡から出土する銭貨について、分析を行った。その結果、都市生活の営まれた場所では中国本土の銭貨流通と類似する状況を示すが、一方で宮殿や聖地ではまったく異なる様相が明らかとなった。

東北アジアにおける出土銭研究の、今後の課題としては、まず、出土銭の事例収集が必要であ

ろう。窖蔵銭の事例は、発見された地域において、銭貨流通がかなり盛んに行われており、銭貨が基準通貨として機能していたことを示す。しかし一方で、窖蔵銭の発見されない地域だからといって、銭貨流通が行われていなかったのではない。東北アジアは、この様な「窖蔵銭はないが、銭貨流通はある程度行われていた」地域である。この銭貨流通の状況の粗密を解明するためには、遺構に伴わない事例をも含めた、遺跡から出土する銭貨の事例を集成し、検討を加えていくことが重要である。

また、それら東北アジアの出土銭を、銭貨流通の中に、どの様に位置づけていくかが、次の課題となろう。その作業には、窖蔵銭の事例との比較検討が、ある程度有効であると考える。今回のモンゴル国の出土銭を分析した試みでも、窖蔵銭との比較を通して、都市生活の営まれた場所と、宮殿・聖地では銭貨の様相が異なることが明らかにされた。

中国を含めた東アジアの出土銭の研究は、まだ緒に就いたばかりであり、解明しなければならない問題は多い。今回は、東北アジアの流通について、出土銭から検討を加えたが、これもほとんど初めての試みと言って良い。本論が、当地域における出土銭研究の一助になれば幸いである。

注・参考文献

１）三宅俊彦　「唐・宋代の窖蔵銭」『博望』創刊号 2000 年
　　三宅俊彦　「中国の窖蔵銭」『季刊考古学』第 78 号 2002 年
２）呉宗信　「三道営子窖蔵古銭清理簡報」『中国銭幣』1986 年第２期
３）遼寧省巴林左旗文化館　「遼上京遺址」『文物』1979 年第５期
４）陳家槐　「吉林省樺甸県白山鎮出土一批金代遺物」『博物館研究』1983 年第１期
５）魏仁華　「河南鄧県発現大批古銭」『考古』1964 年第８期
６）輯安県文物管理所　「吉林輯安発現宋銭」『考古』1962 年第 11 期
７）遵化県文物管理所　「河北遵化県出土古銭幣和元代文物」『考古』1987 年第７期
８）曹伝松　「攸県、澧県、邵陽発現古銭窖」（澧県部分）『湖南考古輯刊』第二集 1984 年
９）白光・文芸　「豊寧雲霧山村遼代窖蔵銭整理簡報」『文物春秋』1993 年第３期
10）呂文利・呉振強　「赤峰発現遼銭窖蔵」『中国銭幣』1993 年第４期
11）康立君　「内蒙古巴林左旗土木富州出土遼代窖蔵銅銭」『内蒙古金融』銭貨上冊 1987 年
　　なお、筆者はこの資料を入手できなかったが、各種銭貨の数量の情報を、慶応大学・鈴木公雄教授よりお教えいただいた。
12）劉福珍　「定州市発現元代窖蔵」『文物春秋』1995 年第２期
13）周亜楽　「安吉出土元代銭幣窖蔵」『中国文物報』2003 年３月５日
14）臨安県文物館　「浙江臨安県発現元代銅銭窖蔵」『考古』1987 年第５期
15）С.В.Киселев, *Древнемонгольские города*, Москва1965
16）Mongolian Academy of Sciences and The Yomiuri Shimbun, *Gurvan Gol Historic Relic Probe Project (1991-1993)*, Japan1994
　　および、白石典之による踏査によって採集された銭貨の合計である。
17）白石典之　『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社 2002 年
18）三宅俊彦　「モンゴル国アウラガ遺跡出土の銭貨」『出土銭貨』第 19 号 2003 年
19）内蒙古文物考古研究所副所長の魏堅先生のご厚意により、出土遺物を見学していた際に確認した。